

2008年度博士学位論文要旨

# 日中近代文学の比較研究

——夏目漱石・魯迅と日本の自然主義文学との葛藤を中心に——

桜美林大学大学院 国際学研究科 環太平洋地域文化専攻

宋 剛

## 目次

### 序 章

- 第一節 問題意識
- 第二節 先行研究
- 第三節 研究方法
- 第四節 論文構成

## 第一部 近代・文学——日中近代文学の誕生と日本自然主義文学の系譜

### 第一章 日中近代文学誕生の歴史的背景

はじめに

- 第一節 アヘン戦争と黒船来航——国家の運命
  - 第二節 中国と日本の異なる日清戦争——模倣の主客置換
  - 第三節 日露戦争と辛亥革命——近代化の分岐点
- おわりに

### 第二章 日中近代文学の誕生とその思想的背景

はじめに

- 第一節 日中近代思想受容の異同における一考察——福沢諭吉と巖復との比較を中心に
  - 第二節 日中近代文学の誕生に関する一考察——坪内逍遙と梁啓超の場合
- おわりに

### 第三章 日本の自然主義文学の系譜

はじめに

- 第一節 ヨーロッパにおける自然主義文学の誕生と変遷
  - 第二節 日本近代文学におけるフランス自然主義文学の受容——「没理想論争」を通して
  - 第三節 日本自然主義文学の誕生と展開
- おわりに

## 第二部 漱石・魯迅——自然主義文学との葛藤にみるその人と文学

### 第四章 夏目漱石と魯迅の接点

はじめに

第一節 漱石と魯迅の共通点と接点——先行研究を踏まえて

第二節 魯迅と彼の同時代人が記録した夏目漱石

第三節 周作人の漱石受容にみる魯迅と漱石の影響関係

おわりに

## 第五章 漱石・魯迅の青年時代とその文学の中の青年像——郁達夫『沈倫』の彼岸

はじめに

第一節 郁達夫の生涯とその研究史

第二節 自然主義文学の中の青年像——郁達夫の『沈倫』の場合

第三節 長男と末っ子

第四節 漱石世界の青年たち——家の支配者と被支配者

第五節 「故郷」論——青年、希望、楽園

おわりに

## 第六章 漱石・魯迅の文学に現れた恋愛観・婚姻観と女性像——日本の自然主義文学と対照して

はじめに

第一節 自然主義文学にみる恋愛観と女性像

第二節 漱石・魯迅の文学に現れた恋愛観・女性観——『それから』・『門』と「傷逝」の場合

第三節 夏目漱石と魯迅のイプセン受容に関する一考察

おわりに

## 第七章 漱石・魯迅における個人と社会・個人と国家——田山花袋の『重右衛門の最後』と比較して

はじめに

第一節 『重右衛門の最後』に関する一考察——遺伝・環境に制限された「自然児」と「濁った世」

第二節 漱石の日露戦争観——「趣味の遺伝」を中心に

第三節 余計者と彼らを生み出す社会——「孔乙己」をめぐる

おわりに

## 第八章 夏目漱石の「自己本位」思想——日本の自然主義文学者が到達し得なかった地点

はじめに

第一節 自然主義文学を堅持した日本の自然主義文学者——田山花袋の場合

第二節 夏目漱石の「自己本位」思想——日本の自然主義文学者の到達し得なかった  
地点

おわりに

第九章 魯迅の「藤野先生」に関する一考察——平川祐弘説の補足としての仮説

はじめに

第一節 「藤野先生」とその周辺

第二節 作品執筆時期と仙台時代に共通する背景

第三節 二つの時期における魯迅の寂寞の心境

おわりに

終章

第一節 時代と文学との関連について

第二節 日本における自然主義文学と非自然主義文学との葛藤について

第三節 夏目漱石と魯迅の文学と思想における共通点について

第四節 今後の研究課題

参考文献

初出一覧

## 論文要旨

### 1. 問題意識

本研究は、近代という歴史背景と、東西文明の衝突という思想的背景の下で、夏目漱石・魯迅と日本の自然主義文学との葛藤という側面に光を当て、日中両国の近代文学の比較研究を試みたものである。本研究の問題意識を具体的にいうと以下のとおりである。

1840年のアヘン戦争と1853年の黒船来航により、中国と日本は近代化の道を進むことを余儀なくされ、いわゆる「外発的」(夏目漱石)な開化の道を進むこととなった。ところが、かの日清戦争という時点で、中国は日本より近代化が遅れていたといわざるを得ない。一体、中日両国が、西洋から流れ込んだ近代思想と文化を、いかに吸収し、いかに消化して各自の成長を遂げていったのか。

そこで、このことを考察する手段の一つとして、両国の近代文学の比較が必要不可欠ではないか、と私は思う。なぜなら、時代の先頭に立つ知識人が、西洋の近代思想を受容する際に、そしておのれの思想を国民のレベルにまで浸透させる際に、文学はいずれも、当時としては非常に重要な方法であったからである。

実は、日清戦争後、実学を目的として清朝政府によって派遣され、日本に留学に来た青年が数多くいた。その中から、まもなく文学に転向した人物が少なからず現れた。魯迅(1881-1936)と郁達夫(1896-1945)はその中の代表者である。しかし、郁達夫が日本の自然主義文学とその後身とも言われる私小説に心酔していたのに対して、自然主義文学の全盛期に文学を志した魯迅は、むしろ非自然主義文学者である夏目漱石(1867-1916)の文学に心を傾けていた。

今日の中国では、郁達夫文学は読み直される傾向を見せているが、その影響力は、魯迅文学には及び難い。一方、日本では、漱石、武者小路、プロレタリア文学等の、非自然主義の文学が形式や内容を変容させてきた中、自然主義—私小説系統の文学が、明治後期以来の文学の主流の一つであることは、誰も否定できない。

このような中国と日本の文学史における自然主義に関する相違は、見方にもよるが、上に述べた両国の近代思想受容の相違に根源するのではないかと私は思う。となると、「個人」をあくまで追求していた日本の自然主義文学——本研究では田山花袋(1871-1930)文学を主に扱った——とそれに影響された郁達夫文学を背景として、魯迅と漱石の文学を比較することは、文学の域に止まらず、両国の伝統文化、国民性、社会問題及び個人倫理などの方面にも関連するものであり、実に研究に値するものであると断言していい。

### 2. 先行研究

本研究では、夏目漱石と魯迅の比較を中心とするため、この二作家に関する先行研究を次の三項目に分けて記す。日本の自然主義文学と郁達夫文学に関する先行研究については、本研究の第三章と第五章で記したが、ここでは略す。

## 2.1. 日本における漱石文学の研究

今日の漱石研究は到底読みきれないほどある。その中で、もっとも重要な位置を占めているのは、小宮豊隆（1884－1966）と江藤淳（1932－1999）の研究である。

小宮豊隆は、『夏目漱石』（上・中・下三部、岩波書店、1938年）をはじめ、『漱石 寅彦 三重吉』（岩波書店、1942年）、『漱石の芸術』（岩波書店、1942年）などの著書を出版し、1917年から刊行された『漱石全集』（岩波書店）にも全力を挙げて取り込んだ。その中で、漱石研究における小宮豊隆の最も顕著な仕事は、漱石が「修善寺大患」を契機として、「人と芸術とは、より良く、より東洋的に、急激に変化」し「後年の則天去私の人生観」（「夏目先生小記」）を成した、という「則天去私」説を確立させたところにある。

江藤淳の漱石研究は、1953年『三田文学』に連載し1956年に出版した『夏目漱石』（東京ライフ社）に始まり、1975年の『漱石とアーサー王伝説 「薙露行」の比較文学的研究』（東京大学出版会）をはさみ、集大成作『漱石とその時代』（全五巻、新潮社、1970～99年）に至った。従来の漱石研究、特に小宮豊隆の「則天去私」説に対する江藤淳の批判精神は、早くも早期代表作の『夏目漱石』の第一章「漱石神話と『則天去私』」から遺憾なく顕になっている。その中で江藤淳は、「漱石に関する神話は多いが、その最も代表的なものは『則天去私』神話である」と漱石がすでに神格化されている現実を指摘し、さらに「最も熱心な『則天去私』の祖述者である小宮豊隆の『夏目漱石』」を取り上げ、その結論として「漱石の偉大さがあるとすれば、それは漱石が特別な大思想家だったからでも、『則天去私』に悟達したからでもなく、漱石の書いたものが文学であり、その文学の中には、稀に見る鋭さで把えられた日本の現実があるからである」と画期的な漱石像を打ち出し、後の漱石論の方向を決定しているといえよう。

日本における漱石研究は、同世代の人々より後の世代の小宮豊隆等に至り、また戦後の江藤淳より今日に至って、早くも爛熟しているといつてよいのであろう。

近年において、石原千秋と小森陽一の研究は特に注目を集めている。両氏編著『漱石研究』（全18巻、幹林書房、1993～2005年）は現代漱石研究を幅広く紹介し、新たな成果を掲載している。さらに、島田雅彦『漱石を書く』（岩波書店、1993年）は、「刺激を受けたもの」として4冊の著書をあげている。それに対して、私も同感であるため、ここに記すことにする。それは、桶谷秀昭『夏目漱石論』（河出書房新社、1972年）・蓮實重彦『夏目漱石論』（青土社、1978年）・大岡昇平『小説家夏目漱石』（筑摩書房、1988年）・柄谷行人『漱石論集成』（第三文明社、1992年）の4冊である。

一方、現在の漱石研究は、単一の作品に集中して議論を深化するもののほか、文学以外の域に達する論もあるし、外国人研究者の成果も多く、多彩な局面を迎えている。例えば、幕府役人の子孫でありながら、日露戦争後の時代の寵児である漱石の「哀傷」をその文学を通じて捉えようとした平岡敏夫『漱石——ある佐幕子女の物語』（おうふう、2000年）、およびつい昨年出版された、『坊ちゃん』と日本アニメーションの名作である「トトロ」、「ドラえもん」とを母性の視点から比較を行った山下聖美『一〇〇年の坊ちゃん』（D文学

研究会、2007年)や、あえて客観的視点を捨て、個人的な情熱を遮らないダミアン・フラナガン(英)著、大野晶子訳『世界文学のスーパースター——夏目漱石』(講談社インターナショナル、2007年)などがあげられよう。

## 2.2. 日中両国における魯迅文学の研究

中国では、1918年発表した小説「狂人日記」をはじめ、魯迅の作品に関する評論は枚挙に暇がないほどある。その中で、魯迅の中国近代文学史における第一人者の地位を定着させたのは、中華人民共和国の初代主席毛沢東(1893-1976)にほかならない。そして、1966年から10年間も続いた文化大革命を経、魯迅はさらに神格化されるようになった。しかし近年になって、改革開放後の思想自由化思潮の浸透が目立ち、以前の権威に対する過剰な反発が原因か、魯迅は故意に担ぎ上げられた権威の一つとして、散発的に批判を受けていることも無視できない。

日本では、魯迅の作品は、井上紅梅の小説集『呐喊』と『彷徨』の全訳『魯迅全集』(全一卷、1932年)、佐藤春夫と増田渉共訳の『魯迅選集』(岩波書店、1935年)、改造社による『大魯迅全集』(全七巻、1936年)、竹内好・松枝茂夫・増田渉共訳の『魯迅選集』(全十三巻、岩波書店、1956年)、竹内好の『魯迅文集』(全六巻、筑摩書房、1976年)、全面的かつ最新の資料を用いた魯迅作品集『魯迅全集』(学習研究社、1984年)を通じて、以前から広く読まれてきた。さらに、藤井省三『東京外語支那語部——交流と侵略のはざままで』(朝日新聞社、1992年)によると、日本が世界で始めて魯迅を紹介していたという。魯迅が日本で紹介されてから、日本における魯迅研究は、第二次世界大戦戦前の宣教師・教育家清水安三(1891-1988)の紹介、戦時中及び戦後の、中国文学者・評論家竹内好(1910-1977)研究と丸山昇の研究などを経て今日に至った。特に竹内好は、著書『魯迅』(河出書房、1944年)、及び翻訳『魯迅評論集』(岩波書店、1953年)、『魯迅作品集』(筑摩書房、1953年)を世に送り、その、魯迅研究を通じて日本の近代社会を批判するという方法によって、後に「竹内魯迅」といわれる独特な魯迅論を形成している。

## 2.3. 漱石と魯迅の比較研究

1976年に出版された平川祐弘『夏目漱石：非西洋の苦闘』(新潮社)は「魯迅と漱石」というテーマの先行研究として知られている。その中で、平川は、先進国での留学と外国人先生からの温情という、漱石と魯迅がともに有する人生体験、及び魯迅が「クレーグ先生」を翻訳していた事実から推論して、漱石の「クレーグ先生」と魯迅の「藤野先生」との影響関係を指摘している。さらに、翌年の檜山久雄『魯迅と漱石』(第三文明社)は、この領域において最も早く出版された研究書であり、漱石の『夢十夜』と魯迅の詩集『野草』との比較も含んでいる。

1980年代以降、藤井省三は、力作『ロシアの影——夏目漱石と魯迅』(平凡社、1985年)を出した。さらに、日本人研究者の柴崎信三は、研究対象を時代背景と緊密に結び付けて

『魯迅の日本漱石のイギリス —— 「留学の世紀」を生きた人びと』(日本経済新聞社、1999年)を出している。1990年代に入ると、中国人研究者たちは、この「漱石と魯迅」の比較研究の領域に足を入れ始めた。林叢の『漱石と魯迅の比較文学研究』(新典社、1993年)と李国棟の『魯迅と漱石：悲劇性と文化伝統』(明治書院、1993年)はその成果である。

21世紀に入ると、多くの作品論が現れた。李国棟の『魯迅と漱石の比較文学的研究：小説の様式と思想を軸にして』(明治書院、2001年)、潘世聖の『魯迅・明治日本・漱石：影響と構造への総合的比較研究』(汲古書院、2002年)、樂殿武の『漱石と魯迅における伝統と近代』(勉誠出版、2004年)はそれである。

### 3. 研究方法

日中両国の近代文学の独立性における相異に反映されるかのように、文学研究と作家研究を別問題として扱う日本の文学研究が少なからずあり、そして、文学と時代との関連においても研究者たちの関心がやや薄れているような印象を私は受けている。一方、中国の文学研究は、作品内部に立ち入って考察するものが未だに少なく、もっぱら文学者の歴史的地位と文学の実用性と宣伝性に注目するものが多いように思われる。要するに、日本の文学研究を通じては近代文学の全体像が容易に把握し難い一方、中国の文学研究を読むと、近代文学の輪郭は伺えても、個々の作品については模糊としている、ということである。

このような両国の文学研究の状況を受け、本研究では、時代と文学との影響関係というマクロ的枠組みの中で日中両国の近代文学の誕生と相互的影響関係を探り、さらに、「青年像」、「女性像」、「個人と国家・社会」という、日本の自然主義文学と非自然主義文学の双方に見られるキーワードに即し、夏目漱石、田山花袋、魯迅、郁達夫の作品を立ち入って考察・比較した。そして、それによって漱石と魯迅の文学と思想の共通点にせまった。

### 4. 各章の要約

本研究は序章と終章を別とすれば、二部九章より構成される。各章の概略は以下のとおりである。

序章では、本研究の問題意識、先行研究、研究方法及び論文の構成を述べた。

第I部は、三つの章で構成される。

第一章では、アヘン戦争と黒船来航以後の中国と日本の近代史を扱い、日中両国の近代文学の歴史的背景を考察した。

第二章では、巖復と福沢諭吉を中心に両国の近代思想史を概観し、梁啓超と坪内逍遙を発端とする両国の近代文学史の流れを把握し、両国近代文学の誕生を促す時代背景を考察した。

第三章では、日本自然主義文学の誕生と変遷、つまり日本の自然主義文学者たちは、如何にしてヨーロッパの自然主義文学を継承したのか、如何にしてそれを「私小説」へ変遷させていったのか、という文学史の流れを述べた。そして、その源流であるフランス自然



主義文学についても簡単に紹介した。

第Ⅱ部は、第四章から第九章までである。

第四章では、夏目漱石と魯迅の接点について考察し、魯迅と周作人の漱石受容について比較した。

第五章では、郁達夫の「沈倫」（1921年）をとりあげて、日本の自然主義文学の影響を受けた中国文学の中の青年像を把握し、その特性を明らかにした。一方、魯迅の『故郷』（『新青年』第九卷第一号）と漱石の『野分』（1907年）などの作品の分析を通じて、閉塞した時代の中で、両作家における自国の青年たちに対する似通った感情を検討した。

第六章では、比較文学論として、田山花袋の『蒲団』・『妻』に照らし、漱石の『それから』・『門』と魯迅の『傷逝』における二作家の恋愛観と女性観の共通点を見出そうとした。さらに、漱石と魯迅のイプセン受容について比較した。

第七章では、田山花袋の『重右衛門の最後』（「アカツキ叢書」、1902年）の主人公藤田重右衛門をとりあげて、漱石の「趣味の遺伝」（『帝国文学』、1916年1月号）と魯迅の『孔乙己』（『新青年』第四卷第六号）の主人公と比較した。周囲の人に殺された重右衛門の死を「自然の発展」に帰して描いた花袋に照らし、伝統と社会に真正面から向かった漱石と魯迅の共通点を浮き彫りにした。

第八章では、比較思想論として、西洋文明の受容という視点から、漱石の「自己本位」と田山花袋の『露骨なる描写』（『太陽』、1904年2月号）との比較によって、漱石と魯迅の共通点を探った。

第九章では、魯迅の「藤野先生」（1926年）の誕生について迫ろうとした。これは先行研究を補足するものである。

終章では、本研究の全体を見渡し、日中両国近代文学史がともに有する、自然主義文学と非自然主義文学との葛藤を比較し、両国の近代文学の異同を探った。最後に、時代と文学、日本の自然主義文学と非自然主義文学との葛藤、漱石と魯迅の文学と思想の共通点という三つの面について結論を述べた。簡単にまとめると、以下のとおりである。

時代と文学との関連については、まず前者が後者を生むという関係にある。そして、時代と文学の間には、文学者という存在が介在している。その文学者の出身、教育、体験、環境、思想、動機など、さまざまな条件によって、文学の形式と内容が決定される。逆にいうと、文学は文学者のこれらの特性を反映し、大きくいうと、同時代の文学には、その時代が映っている。

つぎに、時代と文学との関連を日中両国の近代文学に即して具体的に比較し、次の結論を得た。比較的安定した日本と激動した中国との時代・社会状況、および近代文学の代表的先駆者である純文学者坪内逍遙と政治家梁啓超との個人差によって、日本では文学の独立性と技巧性が重んじられる傾向を示し、文学者の社会地位も上がっていく一方、中国では文学の実用性＝能動性が最初から重要視されてきたという点である。

さらに、日本の自然主義文学と非自然主義文学との葛藤・相異についていえば、日本の

自然主義文学者の多くは、生涯自然主義を徹底し、私生活を破壊してでも文学を優先させていたのに対して、漱石は、己の思想を伝えるためには、文学の形式や主義に拘泥せず、絶えず新境地を切り開いていた。

最後に、夏目漱石と魯迅の文学と思想の共通点については、魯迅が漱石から受けた影響は、文章表現にも見えるが、社会を冷静に分析する際の「余裕」と社会批判に重点が置かれていると私は考えた。文学それ自体を目的としなかった文学者として夏目漱石と魯迅を捉え、その文学の底流にある倫理観を中心とする思想に主に注目すべきであると分析したのである。

## 5. 将来の研究課題

日本文学についていえば、『蒲団』(1907年)以降の花袋や『新生』(1918-19年)以降の藤村に始まり、葛西善蔵等の奇跡派同人によって継承された自然主義系統の私小説に関して研究を進めたい。

中国文学についていえば、独立性がやや欠けている近代文学と、多岐にわたり多様化する現代文学との間には、どのような関係で結ばれているのか。つまり、歴史の流れから見ると、中国近代文学は、現代文学の生みの親であるはずだが、両方の顔付きがあまりにも異なっているため、近代以来の中国文学は、どのように止揚・発展されてきたのか、という課題に挑戦したい。

## 参考文献

### I. 日本語文献（五十音順）

#### i. 論文

1. 阿木津英「所有された女の精神、またその破れ目」、『国文学解釈と鑑賞』第70巻6号、2005年
2. 石原千秋「反=家族小説としての『それから』」、『東横国文学』19号、1987年
3. 板垣直子「漱石文学の背景」、『近代文学研究叢書』41、1987年
4. 植田渥雄「試論鹽谷濫・『支那文學概論講話』與周樹人・『中國小説史畧』之關係」、『桜美林大学中国文学論叢』17号、1992年
5. 植田渥雄『『文学改良芻議』考：〈文学革命〉の旗印をめぐって』、『二三十年代中国と東西文芸：蘆田孝昭教授退休記念論文集』、東方書店、1998年
6. 小川利康「中国語訳・有島武郎『四つの事』をめぐって——『現代日本小説集』所載訳文を中心に」、『人文科学』大東文化大学紀要、第30号、1992年
7. 駒尺喜美氏「漱石における厭戦文学・趣味の遺伝」、『日本文学』、1972年6月号
8. 斉藤英雄『『真珠の指輪』の意味と役割——『それから』の世界』、『日本近代文学』29集、1982年
9. 重松泰雄「夏目漱石——起点としての『それから』を中心に——」、『日本近代文学』17集、1972年
10. 宋剛『『三四郎』の中の女性像』、『桜美林世界文学』創刊号、2005年
11. 宋剛「魯迅と漱石——二作家の近代思想の受容と変遷をめぐって」、桜美林大学修士学位論文、2005年
12. 宋剛「主人公たちの運命を左右する脇役の生と死——『こころ』の中の家主について』、『桜美林世界文学』2号、2006年
13. 長堀祐造「魯迅におけるトロツキー観の転回試論——魯迅と瞿秋白——」、『中国文学研究』13号、1987年
14. 長堀祐造「魯迅『革命人』の成立——魯迅におけるトロツキー文芸理論の受容その1——」、『猫頭鷹』6号、1987年
15. 長堀祐造「魯迅革命文学論に於けるトロツキー文学理論」、『日本中国学会報』40号、1988年
16. 藤木宏幸「イプセンの受容」、紅野敏郎ほか編『現代文学講座 明治の文学』、解釈と鑑賞別冊、1975年

#### ii. 著書

1. 饗庭孝男ほか『新版 フランス文学史』白水社、1992年

2. 秋山公男『漱石文学論考—後期作品の方法と構造—』桜楓社、1987年
3. 秋山公男『漱石文学考説—初期作品の豊饒性—』おうふう、1994年
4. 秋山豊『漱石という生き方』トランスビュー、2006年
5. 朝尾直弘・網野善彦ほか編『岩波講座日本通史』第16巻、岩波書店、1994年
6. 浅田喬二編『「帝国」日本とアジア』近代日本の軌跡10、吉川弘文館、1994年
7. 浅野洋・太田登ほか編『漱石作品論集成』全12巻、別巻1、桜楓社、1991年
8. 阿部兼也『魯迅の仙台時代—魯迅の日本留学の研究』東北大学出版会、1999年
9. 安倍能成ほか著、成瀬正勝編『明治反自然派文学集2』明治文学全集75、筑摩書房、1968年
10. 荒正人『夏目漱石』五月書房、1957年
11. 伊井春樹『ゴードン・スミスが見た明治の日本——日露戦争と大和魂』角川学芸出版、2007年
12. 家永三郎編『改訂新版日本の歴史4』ほるぷ出版、1987年
13. 郁達夫著、駒田信二・松枝茂夫訳『郁達夫・曹禺』現代中国文学6、河出書房新社、1971年
14. 郁達夫著、松枝茂夫編『郭沫若・郁達夫集』中国現代文学選集5、平凡社、1962年
15. 石井和夫『漱石と次代の青年——芥川竜之介の型の問題』有朋堂、1993年
16. 石田忠彦『坪内逍遥研究附文学論初出資料』九州大学出版会、1988年
17. 石原千秋『漱石の記号学』講談社、1999年
18. 伊藤整『日本文壇史』全24巻、講談社、1978—79年
19. 伊藤整『小説の認識』岩波書店、2006年
20. 伊藤整『小説の方法』岩波書店、2006年
21. 伊藤虎丸『魯迅と日本人：アジアの近代と「個」の思想』朝日新聞社、1983年
22. 伊藤虎丸ほか編『郁達夫資料補篇』上・下、東洋学文献センター叢刊第18、22輯、東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター、1973—1974
23. 伊藤虎丸ほか編『郁達夫資料総目録附年譜』上・下、東洋学文献センター叢刊第57、59輯、1989—1990年
24. 伊藤虎丸ほか編『近代文学における中国と日本』汲古書院、1986年
25. 稲垣達郎編『坪内逍遥集』明治文学全集16、筑摩書房、1977年
26. 稲垣瑞穂『漱石とイギリスの旅』吾妻書房、1987年
27. 井上光貞・永原慶二ほか編『明治憲法体制の展開』下、日本歴史大系普及版15、山川出版社、1996年
28. イプセン著、毛利三弥訳『イプセン戯曲選集——現代劇全作品』東海大学出版会、1997年
29. 今永清二『福沢諭吉の思想形成』勁草書房、1979年
30. 岩井寛編『作家の臨終・墓碑事典』東京堂出版、1997年

31. 上田博ほか編『日本近代文学を学ぶ人のために』世界思想社、1997年
32. 于輝明『周作人と日本近代文学』翰林書房、2001年
33. 越智治雄『漱石私論』角川書店、1971年
34. 越智治雄『漱石と文明』文学論集2、砂子屋書房、1985年
35. 江藤淳『漱石とその時代』全5部、新潮社、1970-99年
36. 江藤淳『決定版夏目漱石』新潮社、1974年
37. 江藤淳『漱石とアーサー王伝説 「薤露行」の比較文学的研究』東京大学出版会、1975年
38. 江藤淳『夏目漱石』近代作家研究叢書128、日本図書センター、1993年
39. 大岡昇平『小説家夏目漱石』筑摩書房、1988年
40. 大久保純一郎『漱石とその思想』荒竹出版、1974年
41. 太田哲男『大正デモクラシーの思想水脈』同時代社、1987年
42. 太田哲男『麻醉にかけられた時代—1930年代の思想史的研究』同時代社、1995年
43. 太田哲男『若き高杉一郎——改造社の時代』未来社、2008年
44. 太田哲男編『暗き時代の抵抗者たち 対談 古在由重・丸山眞男』同時代社、2001年
45. 桶谷秀昭『夏目漱石論』河出書房新社、1972年
46. 片山智行『魯迅のリアリズム——「孔子」と「阿Q」の死闘』三一書房、1985年
47. 加藤周一著、鷲巢力編『科学の方法と文学の擁護』加藤周一セレクション1、平凡社、1999年
48. 加藤仁平『和魂漢才説 増補版』汲古書院、1987年
49. 亀井勝一郎『知識人の肖像』文芸春秋新社、1952年
50. 唐木順三『夏目漱石』修道社、1956年
51. 柄谷行人『増補漱石論集成』平凡社、2001年
52. 柄谷行人ほか『漱石を読む』岩波書店、1994年
53. 河内清『ゾラと日本自然主義文学』粹出版社、1990年
54. 河竹繁俊・柳田泉『坪内逍遙』第一書房、1988年
55. 菅野昭正ほか訳『フランス』世界の文学6-9、集英社、1990年
56. 北岡伸一『独立自尊—福沢諭吉の挑戦—』講談社、2002年
57. 北岡正子『魯迅日本という異文化のなかで——弘文学院入学から「退学」事件まで』関西大学出版部、2001年
58. 北岡正子『魯迅 救亡の夢のゆくえ——悪魔派詩人論から「狂人日記」まで』関西大学出版部、2006年
59. 剣持武彦『近代の小説——比較文学の視点と方法』笠間書店、1975年
60. 剣持武彦『比較文学プロムナード——近代作品再読』おうふう、1994年
61. 小風秀雅編『アジアの帝国国家』日本の時代史23、吉川弘文館、2004年
62. 胡金定『郁達夫研究』東方書店、2003年

63. 胡繩著、小野信爾・狭間直樹・藤田敬一訳『中国近代史 1840—1924』平凡社、1986年
64. 小林秀雄『小林秀雄全集』全12巻、新潮社、1967—68年
65. 小林秀雄編『田山花袋・岩野泡鳴』現代日本文学館7、文芸春秋、1969年
66. 駒田信二『新編 対の思想——中国文学と日本文学』岩波書店、1992年
67. 小宮豊隆『漱石の芸術』岩波書店、1942年
68. 小宮豊隆『夏目漱石』全3巻、岩波書店、1953年
69. 小森陽一『漱石を読みなおす』筑摩書房、1995年
70. 小森陽一『世紀末の予言者——夏目漱石』講談社、1999年
71. 小森陽一・石原千秋編『漱石を語る』翰林書房、1998年
72. 小山三郎『中国近代文学史年表』同学社、1997年
73. 坂本浩『近代文学論攷——回顧と展望』明治書院、1986年
74. 佐々木英昭『夏目漱石と女性——愛させる理由』新典社、1990年
75. さねとう・けいしゅう『中国人日本留学史』くろしお出版、1960年
76. 柴崎信三『魯迅の日本 漱石のイギリス ——「留学の世紀」をきたした人びと』日本経済新聞社、1999年
77. 島崎藤村『藤村全集』全19巻、筑摩書房、1973—74年
78. 島田雅彦『漱石を書く』岩波書店、1993年
79. 周海嬰著、岸田登美子・瀬川千秋・樋口裕子訳『わが父魯迅』集英社、2003年
80. 周遐寿著、松枝茂夫・今村与志雄訳『魯迅の故家』筑摩書房、1955年
81. 週刊朝日編『値段史年表 明治・大正・昭和』朝日新聞社、1988年
82. 周作人著、水野正大訳『魯迅小説のなかの人物』新風社、2002年
83. 裘士雄・黄中海・張観達著、木山英雄訳『魯迅の紹興—江南古城の風俗誌—』岩波書店、1990年
84. 鈴木正夫『郁達夫 悲劇の時代作家』研文出版（山本書店出版部）、1994年
85. 鈴木正夫『スマトラの郁達夫 太平洋戦争と中国作家』東方書店、1995年
86. 瀬沼茂樹『夏目漱石』東京大学出版会、1970年
87. 仙台における魯迅の記録を調べる会 編『仙台における魯迅の記憶』平凡社、1978年
88. ゴラ著、安東次男・成瀬駒男訳『ゴラ』フランス文学全集7、東西五月社、1960年
89. G. B. サンソム著、金井円・多田実・芳賀徹・平川祐弘訳『西洋世界と日本』筑摩書房、1966年
90. 塩田良平編『作品対照近代文学史』武蔵野書院、1958年
91. 関谷由美子『漱石・藤村——〈主人公〉の影』愛育社、1998年
92. 高木文雄『漱石作品の内と外』和泉書院、1994年
93. 高田昭二『中国近代文学論争史』風間書房、1990年
94. 高田瑞穂『日本近代文学の宿命』明治書院、1982年
95. 高橋徹・可知正孝・丸山昇『世界の文学 I』講座文学・芸術の基礎理論3、汐文社、1974

年

96. 高橋昌子『島崎藤村——遠いまなざし』和泉書院、1994年
97. 高浜虚子『子規と漱石と私』永田書房、1983年
98. 竹内好『新版 魯迅』未来社、1961年
99. 竹内好『竹内好全集』全17巻、筑摩書房、1980—81年
100. 谷崎潤一郎『谷崎潤一郎随筆集』岩波書店、1985年
101. 田村毅・塩川徹也編『フランス文学史』東京大学出版会、1995年
102. 田山花袋著、吉田精一編『田山花袋集』明治文学全集67、筑摩書房、1968年
103. 田山録弥著、定本花袋全集刊行会編『定本花袋全集』全28巻、臨川書店、1993年
104. 千葉俊二・坪内祐三編『日本近代文学評論選（明治・大正篇）』岩波書店、2003年
105. 坪内逍遙著、稲垣達郎編『坪内逍遙集』明治文学全集16、筑摩書房、1969年
106. 坪内祐三『「近代日本文学」の誕生——百年前の文壇を読む』PHP新書421、PHP研究所、2006年
107. 丁文江・趙豊田編、島田虔次編訳『梁啓超年譜長編』全5巻、岩波書店、2004年
108. 遠山茂樹『明治維新』岩波書店、1951年
109. 遠山茂樹『福沢諭吉—思想と政治との関連—』東京大学出版会、1970年
110. 中嶋嶺雄編著『近現代史のなかの日本と中国』東京書籍、1992年
111. 中村哲『明治維新』日本の歴史16、集英社、1992年
112. 中村都史子『日本のイブセン現象 1906—1916年』九州大学出版会、1997年
113. 中村武羅夫『明治大正の文学者』留女書店、1949年
114. 夏目鏡子述、松岡譲筆録『漱石の思ひ出』岩波書店、1929年
115. 夏目金之助『漱石全集』全28巻、別巻1、岩波書店、1993年
116. 西垣勤『漱石と白樺派』有精堂、1990年
117. 西村信雄『戦後日本家族法の民主化』上、法律文化社、1979年
118. 日本文学研究資料刊行会編『自然主義文学』有精堂、1975年
119. 日本文学研究資料刊行会編『夏目漱石』全3巻、有精堂、1970—85年
120. 野口武彦・小森陽一ほか著『変革期の文学Ⅲ』岩波講座日本文学史第11巻、岩波書店、1996年
121. 馬家駿・湯重南『日中近代化の比較』六興出版、1988年
122. 狭間直樹編『共同研究梁啓超——西洋思想受容と明治日本』、みすず書房、1999年
123. 橋口稔編著『イギリス文学史』荒竹出版、1983年
124. 原田敬一『日清・日露戦争』日本近現代史3、岩波書店、2007年
125. 久松潜一ほか著『改定新版日本文学史 近代』至文堂、1964年
126. 桧山久雄『魯迅と漱石』第三文明社、1977年
127. 平岡敏夫『漱石研究』有精堂、1987年
128. 平岡敏夫『漱石——ある佐幕派子女の物語』おうふう、2000年

129. 平岡敏夫編『夏目漱石研究資料集成』全10巻、別巻1、日本図書センター、1991年
130. 平岡敏夫・東郷克美編『日本文学史概説 近代編』有精堂、1979年
131. 平川祐弘ほか編『講座 夏目漱石』全5巻、有斐閣、1981-82年
132. 藤井淑禎『不如帰の時代——水底の漱石と青年たち』名古屋大学出版会、1990年
133. 藤井省三『ロシアの影 夏目漱石と魯迅』平凡社、1985年
134. 藤井省三『魯迅—「故郷」の風景—』平凡社、1986年
135. 藤井省三『東京外語支那語部——交流と侵略のはざままで』朝日新聞社、1992年
136. 藤井省三『魯迅「故郷」の読書史』創文社、1997年
137. 藤井省三『魯迅事典』三省堂、2002年
138. 藤井省三編著『20世紀の中国文学』放送大学教育振興会、2005年
139. 藤井省三・大木康『新しい中国文学史——近世から現代まで』ミネルヴァ書房、1997年
140. 藤田栄一『漱石と異文化体験』和泉選書117、和泉書院、1999年
141. 「藤野先生と魯迅」刊行委員会編『藤野先生と魯迅——惜別百年』東北大学出版会、2007年
142. 藤本淳雄ほか『ドイツ文学史』東京大学出版会、1977年
143. 『文芸読本 夏目漱石1』河出書房新社、1975年
144. 『文芸読本 夏目漱石2』河出書房新社、1977年
145. 『文芸読本 島崎藤村』河出書房新社、1979年
146. 別府恵子・渡辺和子編著『新版アメリカ文学史』ミネルヴァ書房、2000年
147. 本間久雄『坪内逍遙——人とその芸術』松栢社、1959年
148. 正宗白鳥著、高橋英夫編『新編 作家論』岩波書店、2002年
149. 増田渉『魯迅の印象』大日本雄弁会講談社、1948年
150. 松尾正人編『明治維新と文明開化』日本の時代史21、吉川弘文館、2004年
151. 丸尾常喜『魯迅——花のため腐草となる』中国の人と思想12、集英社、1985年
152. 丸尾常喜『魯迅—「人」「鬼」の葛藤—』岩波書店、1993年
153. 丸山昇『魯迅——その文学と革命』平凡社、1965年
154. 丸山昇『魯迅と革命文学』紀伊国屋書店、1972年
155. 丸山昇『魯迅・文学・歴史』汲古書院、2004年
156. 丸山昇、大木昭男編『民族・宗教と世界文学』創樹社、2001年
157. 丸山真男『丸山真男集』全16巻、別巻1、岩波書店、1995-97年
158. 溝口雄三『中国の衝撃』東京大学出版会、2004年
159. 宮内俊介『田山花袋書誌』桜楓社、1989年
160. 宮崎市定『科挙史』東洋文庫470、平凡社、1987年
161. 宮崎市定『宮崎市定全集』第1巻、岩波書店、1993年
162. 毛沢東文献資料研究会編『毛沢東集』第5巻、北望社、1970年



163. モーパッサン著、新庄嘉章訳『モーパッサン全集』全3巻、春陽堂、1965年
164. 森田草平『煤煙』岩波書店、1940年
165. 森田草平『続夏目漱石』義徳社、1942年
166. 森田草平『夏目漱石』甲鳥書林、1943年
167. 毛利三弥『イプセンのリアリズム——中期問題劇の研究』白鳳社、1984年
168. 矢野竜溪作、小林智賀平校訂『経国美談』岩波書店、1969年
169. 山室静『北欧文学の世界』東海大学出版会、1969年
170. 山本昌一『私小説の展開』双文社、2005年
171. 吉田敦彦『漱石の夢の女』青土社、1994年
172. 吉田精一『自然主義の研究』上・下、東京堂、1955年
173. 吉田精一『日本文学史』吉田精一著作集第19巻、桜楓社、1980年
174. 代田智明『魯迅を読み解く一謎と不思議の小説10篇一』東京大学出版会、2006年
175. 樂殿武『漱石と魯迅における伝統と近代』勉誠出版、2004年
176. 李国棟『魯迅と漱石の比較文学的研究—小説の様式と思想を軸にして—』明治書院、2001年
177. 林叢『漱石と魯迅の比較文学研究』新典社、1993年
178. 魯迅『魯迅全集』全20巻、学習研究社、1986年
179. 魯迅・東北大学留学百周年史編集委員会編『魯迅と仙台』東北大学出版会、2004年

## II. 中国語文献（アルファベット順）

### i. 論文

1. 高遠東「『仙台経験』与『棄医従文』——对竹内好曲解魯迅文学發生原因的一点分析」『魯迅研究月刊』300期、2007年
2. 古愛英「『故郷』的繪画美」『魯迅研究』第10巻、1987年
3. 金宏達「魯迅と巖復」『魯迅研究』第10巻、1987年
4. 廖子東「試論魯迅的家庭、婚姻和愛情对他的思想影響」『魯迅研究』第7巻、1983年
5. 陸文采「從子君到莎菲——淺談『新女性』的芸術形象及其美学價值」『魯迅研究』第13巻、1988年
6. 任訪秋「魯迅与晚清的幾個作者——巖復、梁啓超、章太炎」『魯迅研究資料』8、1981年
7. 徐仲佳「直面啓蒙的倫理陷阱——從涓生的兩難看1920年代中国啓蒙思想的現實困境」『魯迅研究月刊』307期、2007年
8. 張永泉「『傷逝』と個性解放」『魯迅研究』第10巻、1987年
9. 朱寿桐「魯迅創作中的非理性因素」『魯迅研究資料』16、1987年
10. 趙曉笛「魯迅与紹興文化之關係」『魯迅研究資料』22、1989年

11. 張学義「棄医従文精神創痛の深情撫慰」『魯迅研究月刊』303期、2007年

ii. 著書

1. 北京魯迅博物館編『魯迅生平事跡——1881—1936』文物出版社、1960年
2. 陳漱渝『軼覆与伝承——論魯迅的当代意義』福建教育出版社、2006年
3. 陳漱渝ほか編『世紀之交的文化選択』湖南文芸出版社、1995年
4. 陳漱渝ほか編『誰挑戰魯迅——新時期關於魯迅的論争』四川文芸出版社、2002年
5. 陳子善・王自立編『回憶郁達夫』湖南文芸出版社、1986年
6. 程麻『溝通与更新——魯迅与日本文学關係發微』中国社会科学出版社、1990年
7. 戴逸・楊東梁・華立『甲午戦争と東亜政治』中国社会科学出版社、1994年
8. 丁賢俊『洋務運動史話』社会科学文献出版社、2000年
9. 丁言昭編『郁達夫日記』山西教育出版社、1997年
10. 郭文友『千秋飲恨——郁達夫年譜長編』四川人民出版社、1996年
11. 況浩林『簡明中国近代經濟史』中央民族学院出版社、1989年
12. 李何林編『魯迅論』大安、1968年、(北新書局1930年版影印)
13. 梁啓超『飲冰室文集』全16卷、臺灣中華書局、1960年
14. 林非『魯迅前期思想發展史略』上海文芸出版社、1978年
15. 林增平・郭漢民・李育民編『辛亥革命』巴蜀出版、1989年
16. 劉悦斌『戊戌維新運動史話』社会科学文献出版社、2000年
17. 李宗英・張夢陽編『六十年来魯迅研究論文選』下、1982年、中国社会科学出版社
18. 魯迅博物館魯迅研究室編『魯迅年譜』全4卷、人民文学出版社、1981—84年
19. 馬宇平・黄裕冲編『中国昨天與今天——1840—1987 国情手冊』解放军出版社、1989年
20. 茅盾ほか『憶魯迅』人民文学出版社、1956年
21. 牛仰山『中国近代文学与魯迅』瀋江出版社、1991年
22. 牛仰山編『嚴復研究資料』海峡文芸出版社、1990年
23. 潘世聖『魯迅・明治日本・漱石——影響と構造への総合的比較研究——』明治書院、2002年
24. 任訪秋『中国近代文学史』河南大学出版社、1988年
25. 舒新城『近代中国留学史』中国出版社、1973年(1926年版複製)
26. 孫郁編『倒向魯迅的天平』中国社会科学出版社、2004年
27. 王拭『論嚴復與嚴訖名著』商務印書館、1982年
28. 王映霞『我与郁達夫』广西教育出版社、1992年
29. 王蘧常『嚴幾道年譜』商務印書館、1936年
30. 王自立、陳子善編『郁達夫研究資料』下、天津人民出版社、1982年
31. 武德運『外国友人憶魯迅』北京図書館出版社、1998年
32. 厦門大学中文科編『魯迅在厦門』福建人民出版社、1978年

33. 夏曉虹『覺世と伝世——梁啓超の文学道路』上海人民出版社、1991年
34. 薛綏之主編『魯迅生平史料匯編』第2輯、天津人民出版社、1982年
35. 許廣平『欣慰的紀念』爾雅社、1978年
36. 許壽裳『亡友魯迅印象記』人民文学出版社、1959年
37. 許壽裳『我所認識的魯迅』人民文学出版社、1978年
38. 張恩和編著『郁達夫研究綜論』天津教育出版社、1989年
39. 鄭家建『被照亮的世界——「故事新編」詩学研究』福建教育出版社、2001年
40. 周建人述・周曄筆錄『魯迅故家的敗落』湖南人民出版社、1984年
41. 周作人『瓜豆集』河北教育出版社、2002年
42. 周作人『魯迅的青年時代』、河北教育出版社、2002年
43. 周作人『芸術と生活』河北教育出版社、2002年
44. 周作人『知堂回想録』、河北教育出版社、2002年
45. 周作人著、張明高ほか編『周作人散文』全4卷、中国広播電視出版社、1992年